

国語科を中心とした低学年の授業づくり II

大岸 啓子

1. はじめに

本稿は「国語科を中心とした低学年の授業づくり I」（平成 23 年度海星女子学院大学研究紀要）の続編である。国語科を学級づくりの核とした理由や、入学当初の子どもたちの実態については、前年度の紀要を参照されたい。

本稿では、第 1 学年の教材『たぬきの糸車』（11 月）と、『花いっぱいになあれ』（2 月）の取組を通した授業づくりについて述べていくことにする。

国語科の授業を参観すると、子どもたちが次々に発表をしているが、どの文章や言葉に基づいて発言しているのか分からなかったり、45 分の授業で、子どもたちに新しい発見があったのだろうかや疑問をもったりする場面に出合うことが度々ある。

筆者は、「言葉や文章から登場人物の思いを探る」ことを通して、子どもたちの国語力と心を育てることを念頭に置いて、授業実践に取り組んできた。以下は、その取組の一端である。

2. 第 1 学年 1 1 月の授業実践

ー『たぬきの糸車』ー

（1）違う世界に生きていても心は通い合う

① 語り継がれてきた民話の中に

人はたった一人で生きることはいできない。信頼し合い、支え合う仲間がいるからこそ、生きていくことができる。

伊豆の民話「たぬきの糸車」には、平和な世界を願い、幸せに生きていきたいという民衆の願いが表れている。この作品を通して、たとえ生きる世界が違って、人は分かり合えることを 1 年生なりに共感させていきたい。

② 違う世界に生きていても

狸とおかみさんとの出会いは、狸のいたずらから始まる。静かな山の中に棲む狸は、ひとりぼっちである。誰かに関わりを求めるかのように、毎晩のようにやってきては、いたずらを繰り返す。

罌を仕掛けて狸汁にしてやろうと、樵に思わせるほどのいたずらぶりであるが、おかみさんは罌にかかった狸を逃がしてやる。毎晩毎晩やってきて、糸車を回す真似を繰り返す狸を「いたずらもんだが、かわいいな。」と思うようになった結果の行動であろう。

冬になり山を下りた樵夫婦が、また小屋に戻ってくるまでの狸の行動は書かれてはいない。しかし、「山のようにつまれた糸のたば」という言葉から、冬の間の狸の行動が浮かび上がってくる。樵夫婦がいない小屋で、一生懸命糸車を回す狸。上手に回せるようになったときの得意気な表情も見えてくる。

のぞいているおかみさんに気がつき、嬉しそうにぴょんぴょこ踊りながら帰る狸の姿。

読み手の心に、温もりが伝わる物語である。

③ 登場人物の思いを探る

おかみさんと狸の心情を考えることにより、二人の言動の意味を探ることができる。

授業では、書く活動を多く取り入れるようにした。分からない言葉や疑問をもった言葉に立ち止まり、自分なりの意見を書くことを通して、「自分の考えをもつ」ことを大事にしたかったからである。

また、授業の終わりには「今日の学習を通して分かったこと」を書く時間を設定した。

「みんなで考えを出し合ったから、もっとよく分かることができた。」「みんなで勉強す

るって楽しい。」ということを実感させたいと思ったからである。

『たぬきの糸車』では「どうしてこんなことをしたんだろう。」「なぜこんなことを言ったんだろう。」など、分からないことを見つけていくことから学習をスタートした。

授業の構造は、次のとおりである。

分からないことを見つける。⇒考えをもつ。
考えを書く。⇒ 発表する。⇒ 意見を比べる。
⇒ 考えを広げる。考えを深める。

人物の気持ちを、文章から離れて発表するのはなく、「～と書いてあるから～と思います。」というように、言葉や文章に立ち止まりながら考えを出し合うことを学習の中心とした。

みんなで考えを出し合う楽しさを意識させることにより、「個」から「集団」への広がり・深まりを目ざしたからである。

（２）子どもたちが見つけた疑問

自分なりの疑問をもつことが、授業参加への第一歩である。子どもたちが見つけた疑問はプリントし、誰がどんな疑問をもったのか、分かるようにした。「ぼくと同じだ。」「わたしと似ている。」「こんなことも見つけたんだ。」など、一人の考えを広げるためである。子どもたちが見つけた疑問は、次のようなものであった。

＜書き出しの場面では＞

1. 題がどうして「たぬきの糸車」なのか。
2. どうして樵夫婦は山奥にすんでいるのか。
3. どうして狸はいたずらをするのか。
4. 樵はどうして罾をしかけたのか。

＜おかみさんが糸を紡ぐ場面では＞

5. 月の明るい晩にどうして糸を紡ぐのか。
6. おかみさんはなぜ糸を紡ぐのか。
7. キーカラカラ、キークルクルという音が不思議。
8. なぜ、狸は障子の穴からのぞくのか。

9. 狸が目を回したのが不思議。

10. 狸はどうして糸車を回す真似をしたのか。

11. どうしておかみさんは吹き出しそうになったのか。

12. 吹き出しそうになったのに、なぜ狸に分からなかったのか。

13. おかみさんは狸を見ていたのに、なぜ糸車を回していたのか。

14. 狸は、どうして毎晩来るんだろう。

15. 毎晩行っているから、糸車が好きになったのか。

16. おかみさんが糸車を回しているのを見て、狸は上手に回せるようになったのか。
＜狸が罾にかかる場面では＞

17. 狸はどうして罾にかかったんだろう。

18. 罾にかかった狸を、おかみさんはなぜ逃がしたんだろう。

＜樵夫婦が山を下りる場面では＞

19. 村へ下りていったのに、春になったらどうして山奥の小屋に戻るのか。

＜狸が糸車を回している場面では＞

20. いたずら狸だったのに、なぜ糸車を回したのか。

21. どうして、お返しに糸車を回したのか。

22. おかみさんが回すのを見ていたから、糸車を回すのが上手になったのか。

23. どうやって狸が糸車を回したのか。

24. どうして山のように白い糸の束があったのか。

25. 助けてもらったお礼に糸をいっぱい紡いだのか。

＜狸が帰っていく場面では＞

26. どうしてぴょんぴょこ踊りながら帰っていったのか。

27. どうしておかみさんは狸を追いかけないんだろう。

1年生の11月の段階でも、物語の中心に迫るような疑問が出るようになった。授業を

通して、自分たちが見つけた疑問が解決するだけでなく、さらに深いことが分かるようになる面白さ——。これが授業の醍醐味である。

考えを出し合う授業の楽しさを実感した子どもたちからは、「次の時間も国語をしたい。」という声が出るようになってきた。頻繁にトラブルが起きていた1学期とは、大きな変容を見せてきた子どもたちである。

(3) 『たぬきの糸車』の授業

『たぬきの糸車』は、子どもたちの実態をふまえて、次のような趣旨で授業に取り組むことにした。

① 教材観

『たぬきの糸車』は、伊豆地方に語り継がれてきた民話である。狸とおかみさんの、ほのぼのとした心の交流が、読み手に伝わってくる。

樵夫婦が暮らしている静かな山奥の一軒家に、毎晩のように狸がやって来ていたずらを繰り返す。そこには、誰かに関わりを求めるかのように訪れる、ひとりぼっちの狸の姿が見えてくる。

樵が罾を仕掛けるほどのいたずらぶりであるが、罾にかかった狸をおかみさんは逃がしてやる。おかみさんの心を動かしたものは、糸車に魅かれて、毎晩やって来る狸の姿である。手が届くような距離まで近づいた狸は、見られていることにも気づかず、無心に糸車を回す真似を繰り返す。毎晩毎晩やって来る狸を、おかみさんは、心待ちにするようになったのだろう。

静かな山の中の月明かりの下に映し出された、おかみさんと狸の交流の温もりを、子どもたちに感じ取らせたい。

② 児童観

子どもたちは、自分の言葉で発表したり、友達の意見と比べたりすることができるようにもなってきた。

情景と人物の思いをつなげて考える子も現

れるようになった。

『たぬきの糸車』では、「助けてもらってよかったね。」「お返しに糸をつむいだんだね。」という感想から、さらに深く読み取るために、狸を助けるに至るまでの山奥の一軒屋の暮らしや、おかみさんの心の動き、樵夫婦が不在の間、一人で糸を紡いでいる狸の姿にも目を向けさせていきたい。

③ 指導観

書き込みをしながら、自分なりの疑問点を浮かび上がらせていくことから学習を始めていく。「ここが分からない。」で終わるのではなく、「こういうことかな。」「～だから、こういうことをしたんだね。」と自分の考えを書くように指示する。

狸が糸車を回す真似をする場面では、おかみさんの視点を通した狸の姿をとらえながら、おかみさんの心の中を探っていくようにする。狸を助けるおかみさんの思いに共感させていきたいからである。

そして、やっと糸車を回せた狸の喜びや、糸が紡げるようになるまでの経過を想像することからも、びよんぴよこ踊りながら帰っていく狸の思いを浮かばせていく。

読むだけではイメージがとらえにくい言葉（糸車、きこり、しょうじ、糸をつむぐなど）は、挿絵や教師の説明を手がかりにすることで、思考の助けとしたい。

また、音読を通して、言葉や場面に着目しながら、読みを深めていくようにしたい。

④ 指導計画（全11時間）

第一次 はじめの感想を書く。（3）

- ・ 全文を読んで疑問を出し合う。（1）
- ・ はじめの感想を書いて、意見を交流する。（2）

第二次 おかみさんと狸の心のふれ合いを中心に読みを深める。（6）（略）

第三次 狸に手紙を書く。（2）

- ・ 読み深めたことをもとに狸に手紙を書く。

⑤ 「はじめの感想」から

T子の「はじめのかんそう」の内容は、三つに分かれている。

始めは「よかったこと」、次は「おもしろいこと」、最後は「ふしぎなこと」である。指示されなくても、自分で区別して書くことができるようになってきた。

《「よかったこと」

たぬきくん、糸車がすきなの。おかみさんがやっていて、まねしてじょうずになったの。たぬきくん、きこりのわなにかかったとき、キャーとこえをだして、おかみさんにたすけられてよかったね。そのかわりに、おかみさんがいないうちに、うちへはいつて糸車をまわしてきれいにまるくして、おかみさんがかえてきてまるい糸になっていて、びっくりしてよかったね。

「おもしろいこと」

たぬきがしょうじのあなからのぞいていて、かげがみえていて、おかみさんはたぬきがいるってわかったのがおもしろいな。

たぬきがぴよぴよこかえていったのがおもしろいな。まいばん、おかみさんのいえにきているのがおもしろいな。

「ふしぎなこと」

おかみさんは、ふゆになると村のおうちにかえて、はるになると山おくにかえていいるからふしぎだな。たぬきは、おかみさんが村にかえていいるうちにおうちにはいつて、糸車をまわして、たばにしているからふしぎだな。さいしょはいたずらをして、あとでやさしくなつてふしぎだな。》

⑥ 狸への手紙

U香のたぬきへの手紙には、授業を通して、「たぬきのきもちがわかってきた。さいごにみんなわかってよかった。いつかわかるんだね。」と書いている。たぬきの気持ちに寄り添いながら読みを深めていったことが、文章にも表れている。

「いつかわかる」という言葉は、U香のとらえた作品のテーマである。「はじめの感想」の書き方と比べると、読みの深化が分かる。《たぬきさん、おかみさんにたすけてもらってよかったね。

たぬきさんはどうして、ふゆのあいだれんしゅうするのかなっておもったよ。たすけてもらったから、おれいをしたのかな。

たぬきさんの一ばんすきなところは、ぴよぴよこおどりながらかえていったところだよ。一ばんかわいかったよ。

たぬきさんが糸をおかみさんにあげよう、という気持ちがわかってきたよ。たぬきさんは、ふゆのあいだいっしょうけんめい糸をつむいだね。がんばったからじょうずにできたね。おかみさんがいないうちにつむいだね。

はじめてできたときのうれしそうなおがみえてきたよ。

山おくのこやにもどってきたときの、おかみさんの「おかしいな。」っていうかおがみえてきたよ。たぬきさんとおかみさんのころはちがうね。

さいごにみんながわかってよかったね。いつかわかるんだね。》

(4) 「たぬきの糸車」の頃の子どもたち

子どもたちは一生懸命考え、友達の意見をよく聞いて自分の発表をつないでいこうとしていた。トラブルが絶えなかった子どもたちが、授業を通して友達と関わっていけるようになってきたのである。

また、その成長の姿は行事でも見ることができた。音楽会の練習が始まった頃は「今年の1年生は音楽会ができるんだろうか。」と心配する声が聞こえてきたほどである。

しかし、日に日に子どもたちの歌声や合奏が変わっていった。「授業を通して子どもは変わる。」「どの子も確実に成長する。」ということ子どもたちは教えてくれた。

そして、3学期は次の段階へと進んでいく。

3. 第1学年2月の授業実践

ー『花いっぱいになあれ』ー

(1) 言葉には「心」が隠れている

この教材では、「言葉から心を育てる」ことを目指した。『花いっぱいになあれ』は、ファンタジーの物語である。美しい色彩の挿絵と温かい言葉に包まれた作品世界に、読み手は引き付けられる。

1年生であっても、言葉から離れた思いつきの発表に終始しないように、言葉と対峙した学習を大切にしてきた。国語科を通して、言葉にこだわり、言葉を選び、言葉を大切にし、言葉を使える子どもたちになってほしいと願ったからである。

この作品では、学校の子どもたちや子ぎつねのコンに同化して内言を想像したり、言葉のイメージを探ったりすることが、子どもたちの心を育てることにつながると考えた。登場人物の優しさや作品世界の温かさが子どもたちに伝わり、心の糧となることを願いながら、学習を進めていった。

(2) はじめの感想から

範読を聞き、心に残ったことを発表する。その後、子どもたち自身で小さな題を付けて、感想を書いていく。これは『たぬきの糸車』から始めたことである。題を付けることによって、何に心が動いたのか、あるいは書きたいことは何なのかがはっきりしてくる。『花いっぱいになあれ』は長文であるが、『たぬきの糸車』のような「なぜだろう。どうしてかな。」で終わらず、筆者が波線で示した文章にあるように、自問自答しながら書き進めるようになっていった。

<Uーの感想の中から>

① 学校の子どもたちへ

子どもたちは、どうしてふうせんに花のたねと手がみをつけてとばしたのかな。町が花でいっぱいになってほしいからかな。それとも町が花でいっぱいになって、きれいになっ

てほしいからかな。

② ふしぎなこと

どうして、まっかなふうせんだけ、町をとおるぬけ、村をとおるぬけ、お山までとんできてコンのところにおりたのかな。

きっと、コンのことがすきなんじゃないかな。きっとすきなんだ。

(3) 学校の子どもたちの願い

ー第二次 第1時の授業ー

目標；学校の子どもたちの願いを読み取る。

発問	花いっぱいになってほしいから、子どもたちはどんなことをしたのかな
----	----------------------------------

文中から「学校の子どもたち」の言動が表現されている言葉を探して(以下の①～③)、登場人物の「心」を考えた。人物の思いを探っていくうちに自分自身の願いと重なる発言も出るようになった。

「わけも言えるよ。」「風船の心が分かる。」「～さんに付け足すよ。」「～君を助ける。」「もし〇〇だったら△△だよ。」と、友達の発言につなげることができるようになっていった。

①ふうせんにお花のたねをつけてとばしました。

↓ この一文から考えたこと

- ・学校で花を育ててもいいけど、学校に行っていない人も花を育てるため。
- ・村の人にも花をあげたい。村には花屋さんがない。
- ・花をいっぱい、町や村の人に咲かせてほしい。
- ・どこの人にも、花をいっぱい咲かせてほしい。
- ・風船に付けて飛ばしたらどこへでも行く。

②「お花をうえましょう。お花をいっばいさかせましょう。」というお手がみもつけました。

(略)

③ みんなでいっせいに「花いっぱいになあれ。わあい。」といってふうせんをとばしました。

↓ みんなで一斉に言ったのは

- ・ みんなで言ったら、本当に花がいっぱいになるような気がしたから。
- ・ 日本を花できれいにしたい。花でいっぱいになったらいいな。
- ・ 願いがかなってほしい。
- ・ 声が響いて心の願いが聞こえるように。
- ・ 花が咲いたら、人間も動物もちょうちよも喜ぶ。
- ・ みんなが幸せになる。
- ・ 心の中も花でいっぱいになる。
- ・ 花が咲いたら気持ちがいい。

(4) 「ふわふわ」の言葉のイメージ

ー第二次 第2時の授業ー

① 第2時の目標

目標は、「『ふわふわ』の言葉のイメージを探りながら、風船の心を想像する」とした。

『花いっぱいになあれ』では、「ふわふわ」が繰り返し使われている。言葉は同じでも、「ふわふわ」に込められた風船の思いは違う。「ふわふわ」のイメージを探りながら、子どもたちは、空を飛ぶ風船になったような気持ちになっていく。

叙述から離れないで、人物の心情（擬人化された風船）を探ることは、子どもたちの思いを深くする。喜びや驚き、心配、安心などの心情を共体験を通して学び取っていくのである。

② 話す・聞く

発問	「ふわふわとんでいくふうせん」には、どんな心が隠れているかな。
----	---------------------------------

風船の心が分かる言葉を探すよう指示すると、見つけたのは次の三つである。

- 一つが、どうまちがえたのか
- 町をとおりぬけ、村をとおりぬけ、お山まで

○ さすがにくたびれて

↓ この三つから風船の心を探り、意見を出し合った。

- ・ 空は水色で、やさしい風が吹いているな。
- ・ 風に乗って飛んでいって気持ちがいいな。
- ・ お日さまがぼかぼかして、風に揺られて気持ちがいいな。
- ・ 拾われるまで飛んでいこう。
- ・ 子どもたちの願いを叶えたいな。

発問	山の中に下りていく風船の「ふわふわ」にはどんな心が隠れているかな。
----	-----------------------------------

- ・ 早く拾われたいな。
- ・ 風船はしんどい。くたびれている。
- ・ すごくくたびれている。
- ・ 町や村を通り抜けて山に行くのは疲れる。
- ・ 人がいないから、どうやって育てるんだろう。
- ・ どうやって水をかけるんだろう。
- ・ どうして一人だけ、ここに来たんだろう。
- ・ みんなと一緒にいたかったのに。
- ・ どうして、ぼくだけ仲間とはぐれてしまったんだろう。
- ・ 最初はみんなと仲良く飛んでいたのに、どうしてお山まで飛んできたんだろう。
- ・ みんなの願いが叶えられるかな。

③ 書く・話す・聞く

まず自分の考えを書く。次に友だちの発表と違うところを見つけて発表していく。それは、比べながら聞く力、類別する力をつけることにつながる。

発問	「ふわふわ」には、風船のどんな心が隠れているでしょう
----	----------------------------

書く ふうせんはふわふわとんでいきました。
＜K子のワークシートから＞

＜うわあ、お日さまがぼかぼか。きもちがいいなあ。はやくひろわれて、きれいできりっぱな花をそだててほしいな。がっこうの子どもたちがてがみをつけてくれたから、お花をいっぱいさかせてくれるよ、きつと。どこへと

んでいくのかな。やさしいかぜがふいてほんとに気持ちがいいな。みんなどこへいくのかな。わたしちがうところよね。みんなのねがいごとをかなえてあげるためにがんばろう。みんなのねがいぜったいかなえてあげるよ」

書く さすがにくたびれて、ふわふわふわふわゆれながら、お山の中へ下りていきました。

<M 菜のワークシートから>

「なんでぼくだけお山までとんできたんだろう。町とか村にいつているふうせんたちは、どうしているのかな。さいしょはみんなといっしょにきもちよくそらをとんでいたのにな。なんでぼくだけお山までとんできたのかな。がっこうからとおいのに、なんでお山までとんできたのかな。」

（５）野原に下りてくる風船

－第二次 第３時の授業－

第３時の目標は「コンのいる野原に下りてくる風船の心を想像する。」とした。

この学習場面でも「ふわふわ」という言葉が使われている。希望に満ちた「ふわふわ」でもなく、くたびれた「ふわふわ」でもない。静かに下りてくる「ふわふわ」である。この「ふわふわ」をどう読ませていくのか。

真っ赤な風船は、小さな野原で昼寝をしているコンに気付く、そうと下りていったのではない。授業では、小さな野原のイメージを膨らませてから、静かに下りる風船の思いを考えさせることにした。一人ぼっちで飛んでいるときとは違う風船の心を出させたいと思ったからである。

① 話す・聞く

挿絵にも目を向けながらコンや風船の心を考えさせた。昼寝をしているコンの表情や野原の様子を思い浮かべる手助けになるからである。また、発表を広げていききっかけになる。この場面の子どもたちの発言は、単発ではなく、友達の発言につないでいこうとしていた。聞く力がついてきた証である。

「風船のことを言うよ。」「コンのことを言いたい。」などという声が、あちこちから聞こえてきた。

② 授業のポイント

心の中に映像を浮かび上がらせる。「ためきの糸車」から継続している発問の形である。

発問	心の中にどんなものが見えてきましたか。
----	---------------------

- ・真っ赤な風船が、山の中の小さな野原にふわふわ下りたところが見えました。
- ・コンがとってもいい夢の中で、おいしいものをたくさん食べたのが見えてきました。
- ・子ぎつねが、昼寝をしているのが見えてきました。
- ・よく分からないけど、おいしいものをたくさん食べた後のような嬉しい気持ちで、目を開けたのが見えてきました。

このような発言が続いた後、昼寝をしているコンの挿絵に注目させると、次のような意見が出た。

- ・コンの寝ている顔が、おいしいものを食べているような顔です。
- ・コンがお昼寝をしているところで、お花がいっぱい咲いているのが見えます。
- ・嬉しそうにお昼寝をしているのが見えてきます。
- ・いい気持ちで目を開けた、嬉そうな顔が見えてきました。
- ・コンの鼻の上に、ちょうちょが止まっています。
- ・きれいな花でいい匂いだから、ちょうちょも喜んでいます。

次のステップとして、野原やコンのイメージが温かく優しいので、風船は不安ではなくなったという読みに発展していった。

発問	こんなところに、ふわふわ下りてきた風船の心を考えましょう。
----	-------------------------------

- ・きれいな野原だな。お花がいっぱい咲いているよ。

・きつねさんが気持ちよさそうに、昼寝をしているな。

・きつねさんが昼寝をしている。子どもたちの願いが叶うといいな。

次に「しずかに」という言葉に着目して、静かに下りる風船の心を考えさせた。

・きつねさんが、いい夢見ているところを起こしたらいけないな。

・きつねが寝ているし、ちょうちょも蜜を吸っているから静かに下りよう。

発表のみで終わるのではなく、書かせることにより、自分の考えをより一層確かなものにさせていった。

<K 也のワークシートから>

«あっ、きつねの子がねているぞ。音をたてたらねているじゃまになるから、ふわふわおろよう。子ぎつねはそだててくれるかな。そだててくれるといいな。»

(6) 「花いっぱいになあれ」の授業から

授業の録音テープを聞くと、どの子もしっかりと声を出し、自分の考えを発表している。

途中で詰まっても、一生懸命考えながら最後まで発言できるようにもなっている。

また、聞いているだけでなく友達を助けたり意見をつなげたりしながら、授業の最後まで食いついてくるようになった。『たぬきの糸車』より、格段に進歩した授業風景である。

毎日の授業を積み上げていくことは、非常に困難な道のりのように思えたこともあったが、子どもたちは確実に前進していった。

『花いっぱいになあれ』の実践については、「トントン」とたたくコンの思いを想像した発言を紹介してこの稿を終えることにする。

なお、子どもたちとの次の学年での授業づくりについては、次年度の紀要で述べたい。

発問	「トントン」とたたくコンの心
	が分かるかな。

U 香；きつねがたいたたら花が咲かないようになるから、コンはトントンとたたいた

と思います。

A 綾；茎が折れちゃだめだから、優しくたたいたと思います。わけは、もしきつねがたたいたら茎が折れるし、土が固くなるから、土を軟らかくしないといけないからです。

参考文献

- [1] 今井鑑三監修 国語教師・竹の会 (1985)
『国語科授業の新展開 16 国語科よい授業の追究』 明治図書
- [2] 今井鑑三監修 国語教師・竹の会 (1986)
『国語科よい授業の要件』 明治図書
- [3] 西郷竹彦編 (1969)
『シリーズ・民話と教育 2 巻
民話の教材分析と授業』 明治図書
- [4] 西郷竹彦編 (1969)
『シリーズ・民話と教育 3 巻
民話の世界・民話の理論』 明治図書
- [5] 西郷竹彦 (1976)
『西郷竹彦文芸教育著作集 11
民話の世界・民話の理論』 明治図書
- [6] 西郷竹彦監修 文芸研編 佐伯匡文 (1985)
『文芸研授業研究ハンドブック①
教材研究の仕方』 明治図書
- [7] 西郷竹彦監修 文芸研編 (1985)
『文芸研教材研究ハンドブック 1
松谷みよ子＝ハナIPPパイになあれ』 明治図書
- [8] 西郷竹彦 (1987)
『教科書指導ハンドブック 子どもの見方・考え方を育てる 1 年の国語 小学校
【光村版】指導書』 明治図書
- [9] 吉永幸司 (1992)
『国語教育ブックレット 3
気持ち発問から文章検討発問へ』 明治図書